オーディオ実験室収載

STAGE+を楽しむ(82)(HP 収載)
―クレーメルのモーツァルトのヴァイオリン協奏曲―

１．始めに

前報(81)に引き続き、STAGE+のクレーメルによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲の演奏の試聴を実施します。

２．試聴音源

今回は、クレーメルによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲の演奏を選びました。

アーノンクールとクレーメルによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

収録日: 1987 年 1 月 22 日

音楽史に圧倒的な存在感を示し、オペラに古典から近現代までと幅広いレパートリーを誇る指揮者であるニコラウス・アーノンクール。彼は 1983 年から 87 年にかけ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を率いて、ヴァイオリニストのギドン・クレーメルと共にモーツァルトのヴァイオリン協奏曲の全曲録音を手がけました。アーノンクールが導き出す色彩感に満ちた音作りと、クレーメルの輝かしい音色が見事に調和し、圧倒的な世界観が創り出されています。

ソリスト:

Kim Kashkashian (ヴィオラ)、ギドン・クレーメル (ヴァイオリン)

演奏:

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮:

ニコラウス・アーノンクール

曲目:

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲第 1 番変ロ長調 K .207

ヴァイオリン協奏曲第 2 番ニ長調 K. 211

ヴァイオリン協奏曲第 3 番ト長調 K. 216

ヴァイオリン協奏曲第 4 番ニ長調 K. 218

ヴァイオリン協奏曲第 5 番イ長調 K. 219《トルコ風》

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調 K. 364

３．試聴の経過

まだ若いアーノンクール指揮ウィーン・フィルハーモニーとクレーメルによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲の演奏です。

古楽からスタートしたアーノンクールがモーツァルトをどうリードするか、意欲溢れる技巧派のクレーメルがどうモーツァルトを弾き切るか、個性派同士の組み合わせが興味あるところです。しかしながら、1 番から 5 番までは、意外にオーソドックスな演奏です。とは言え、ところどころにクレーメルの技巧が冴えるところがあります。

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲は、ヴィオラの Kim Kashkashian が加わります。女性奏者の Kashkashian は初めてですが、落ち着いたヴィオラの音色でクレーメルとのコンビで演奏しています。

収録は 1987 年で、音質はさほどよくありませんが、クレーメルのヴァイオリンも、ウィーン・フィルハーモニーもそれらしい音は出せています。

４．まとめ

クレーメルとアーノンクール指揮ウイーンフィルの演奏の雰囲気が伝わってきました。

以上